

# 図書館ねこデューイ

2022年6月

眞鍋由比

城崎マリンワールドのハマという12歳のメスのトドは日本一言葉がわかるトドとして有名で、その実力を来館者が体験できるツアーまであるとか。「けいれい」とか「ごろん」とかいうと、ちゃんと敬礼したりころがったりしてくれるって。アシカやアザラシの仲間での言葉の聞き分け能力は日本一だそうです。すごいな、ハマちゃん。

猫を飼っている身としては、猫も人間の言葉を理解している気がします。ネットの記事でもそう言われたりします。が、論文レベルでは、猫は飼い主の声を認識できるとか、人間と猫同士でのシグナルを分けている。例えばじっと真正面からみつめたら、猫同志なら威嚇だが、人間がそうした場合は友好と理解している、ということくらいしか証明できていないそうなのです。（『知りたい！ネコごころ』高木佐保著 岩波科学ライブラリー 2020）

けれど、人が他人から受け取る情報の割合は、話す言葉の内容は7%にすぎず、大部分は身だしなみや表情などのノンバーバル（非言語）・コミュニケーションからのものだろう。（『人は見た目が9割』竹内一郎著 新潮新書 2005）とすれば猫は人間が言おうとしていることは理解しているように思えます。理解したうえで、特に返事をするわけでもなく、しっぽを振るだけとか、全くしらんぷりとかはよくあること。



言葉を理解していたと思われる猫の代表格がデューイ。  
『ジュニア版図書館ねこ デューイ 町をしあわせにした、はたらくねこの物語』ヴィッキー・マイロン作 角川つばさ文庫 2012 おそらく世界で一番有名な図書館猫。図書を分類する十進分類法を作ったデューイにちなんで名づけられました。1988年の寒い冬の朝、米アイオワ州のスペンサーの田舎町の図書館の返却ボックスに入れられ凍えていた生後間もない子猫。肉球がしもやけだらけで歩くこともままならない。館長が助けて図書館で飼うことにしました。毎朝、入口にたって利用者を出迎えて、膝の上に乗ったり、書棚の間をパトロールして回ったり、すっかり図書館の人気者に。当然猫アレルギーの人からの反発もあったのですが、二人の内科医に相談

し、図書館の構造上、べったりひっつかなければ大丈夫とお墨付きをもらいました。デューイは押しのけられたり、追い払われても、めげずに膝に乗ろうとする。デューイはつねられたり、しっぽをつかまれたりしても、決して爪で引っかいたりせず、おとなしくしている我慢強い猫でした。職探しに疲れた人や孤独な老人や車いすの少女の膝にのって彼らの図書館にくる楽しみになりました。

デューイのおかげで来館者が増え、それまで認められなかった図書館の改装工事が認められました。映画やテレビの取材があっても、緊張せずに取材班の言うとおりに動くことができる、デキル猫！世界的に有名なスター猫になりました。

みんなに愛されたデューイ。デューイが亡くなるシーンは著者同様やりきれない気持ちになりますが、今でもDewey Library Catで検索すると生きていた頃の彼の動画や写真が見られます。この本の著者である館長が朝、図書館を開けると、ガラスの向こうでおいでおいでをされていて、まさに招き猫！

この本でふれられているNHKの番組の「働くねこ」として出演しているのも見られます。この番組によると図書館猫は130匹もいるそうです。

日本にも図書館猫はいます。長野県の椋鳩十記念館・記念図書館に迷い猫が住みつき、「猫館長」として来館者や職員から人気を集めているそうです。ムクニャンと名づけられた人懐こいこの猫は、ホームページにも載っています。

<http://www.vill.takagi.nagano.jp/toshokan/memorial.html> 【2022年6月1日確認】

